

研究集会に先立って、ワーキンググループによって準備された呼びかけ文には、次の四つの問題系が設定されていた。

一、横光利一のマルクス体験／マルクス理解

年譜事項や読書歴に即し、横光が接触した（可能性のある）マルクス関連文献などを実証的に明らかにしつつ、それらの影響や横光における「唯物論」の可能性を考える。

二、相互理解／相互評価の実態と変遷

横光と個々のプロレタリア作家との相互理解、とくに文学作品・批評活動における評価の変遷を通時的に明らかにし、両者の関係性を掘り下げる。

三、一九三〇年代以降の両者の関係性

新感覚派を継ぐ新興芸術派の動向や、プロレタリア文学退潮後の「国民文学」論などを視野に入れ、戦時体制に移行するなかで両者の概念を問い直す。

四、表現や文体の同時代性

イデオロギーの水準とはべつに、表現や文体の類縁性を明らかにする。共通するモチーフ（身体・空間・事物etc.）に注目し、従来の文学史では見えなかった両者の回路をさぐる。

これらすべての問題を明らかにすることは容易ではないが、今後、取り組むべき課題として会員諸氏に共有され、本特集から新たな対話が始まることを期待したい。

（横光利一文学会運営委員会編集担当）

特集「横光利一とプロレタリア文学」

展望「放蕩」する「時代」のなかの横光利一とプロレタリア文学

山崎 義光

第一七回研究集会での基調報告（第一部）と問題提起（第二部）の各論点がどのように関連していたかという脈絡を、司会者としてというよりも、参加した一人として述べたい。総勢九名による各報告は、いずれも論点が明確で有益かつ興味深かった。横光がプロレタリア文学に言及したテクスト一覧を黒田大河氏にご用意いただいた。すばらしく丁寧なこの一覧が当日の議論に活かされたことを附記しておきたい。しかし当日の討議は、題材や論点が多く、相互関係や焦点、共通理解がみえにくかった。議論のはじめから「モヤモヤ感がぬぐえない」との発言もあった。それはテーマそのものの性質と論点の多さにくわえて司会者の舵取りの悪さによる。提起されながら議論の焦点にならなかった問題提起も残された。慚愧の至りである。ただ弁解交じりに言えば、結論を求める協議の場ではなく、討議・意見交換の場であることを考えば、脈絡がモヤモヤするからこそ、それを晴らす展望を見出したい欲望を持ち帰ることになったのではなかったか、

と思いたい。当日モヤモヤした私もこの場を借りて脈絡の一端を記してみたい。

横光とプロレタリア文学の登場した世界大戦の戦間期、一九二〇～三〇年代は、近代化の趨勢としてあったグローバル化と大衆化が「放蕩」して現れた時代だった^{〔1〕}。そうした「時代」の「放蕩」とともに文学があると横光はとらえていた（時代は放蕩する（階級文学者諸卿へ）『文芸春秋』二三・一）。第一次世界大戦後のヨーロッパと運動した社会主義・共産主義運動の国際性。とともに日本では大正デモクラシーの気運が憲政擁護運動、労働運動などとなって大衆が顕在化した。そうしたなか大衆を政治運動へ先導する前衛知識人が、コミンテルンと関係を結びつつ、目的意識を共有した党派・集団組織体制となってプロレタリア文学運動を展開したのが三〇年前後だった。明治時代には「平民」と呼ばれた社会層が、二〇年代には階級社会論の浸透により無産労働者・プロレタリア「階級」として見出された。しかし、「大衆」は一枚岩

ではなく、無産者・労働者・農民・都市中間層あるいは女性といった諸層が、経済格差、社会運動、出版文化のマス化と差異化等々のなかで複相的に顕在化する。階級社会的な把握ではとらえきれない大衆の諸相があった。

さて、ここでは提起された論点を継時的に捉えるため、当日の順序とは逆に、第二部の問題提起から振り返っておきたい。およそ二〇年代後半から三〇年前後までの横光とプロレタリア文学の関係について、理論をめぐる問題、実作をめぐる問題が提起された。

まず、理論的批評言説における関係から振り返る。対象となつた時期は、二八年の芸術大衆化論争に横やりを入れるようにして展開した形式主義論争を経て、ナツブ隆盛期の三〇年ころまでをおもな対象としていた。柚谷英紀氏はマルキシズムとの対決を経た横光の文学観の変遷を四期にわけて跡づけた。石井佑佳氏は片岡鐵兵の評論を対象に、既成文学との切斷を主張し新しい「時代」の「生活」を肯定的に捉えて表象することを目指すなかで左傾化した片岡の文学観を報告。友添太真氏は平林初之輔の文学理論が「科学」性の重視にあつたことに着眼し、それが社会科学とともに自然科学にも及んでいたことを指摘しながら平林の探偵小説観を論じ、横光とも通底する文学観があつたのではないかとした。「科学」をめぐっては加藤夢三氏が『プロレタリア科学』所載評論のう

無産者・労働者が表象されていないわけではない。しかし、横光の関心は、政治運動に向けたそれではなく、マルキシズム・コミニズムを理論・理念として相手取り論争的に文学論を展開することにあつた。

一方、横光とプロレタリア文学の実作をとりあげた報告があつた。八原瑠里氏は横光「花婿の感想」一名、流行を追ふ男（『改造』二八・四）をとりあげた。実家が地方の地主で、「職業」すなわち「生活」のない夫が、金で流行の車や宝石を買うように、貧乏になることが出世だという「流行」のつて小作人の作った玩具を買い取って売るようになる。が、それによって結婚生活は破綻し、地主から資本家にかわつてしまふ。島村健司氏は横光が時評で高く評価した平林たい子「殴る」（『改造』二八・一〇）をとりあげた。プロレタリア文学派からも黒島伝治や勝本清一郎がその表現手法を評価したことを挙げ、両者の近接の可能性を示した。田口律男氏は葉山嘉樹「淫売婦」（『文芸戦線』二五・一）をとりあげた。葉山はプロレタリア文学派のなかでも作品が評価され影響力をもつたが、この時代の都市小説という観点でとらえたとき、穴倉（ポイド）のイメージにおいて横光「街の底」（『文芸時代』二五・八）「眼に見えた風」（『文芸春秋』二八・一）などと共通性を指摘できるとした。

理論と実作に関する問題提起から私は、「現実」の認識を

ち自然科学に関するものを取りあげ、横光の「現実」概念との関連を述べた。

プロレタリア科学研究⁽²⁾所は、二八年に設立された国際文化研究所を吸収しながら、二九年に設立された民間の学術研究団体で、国際文化研究所以来ナツブに合流する前衛芸術家連盟の作家批評家たち、山田清三郎・林房雄・蔵原惟人・川口浩らがかかわっていた。芸術・哲学・社会科学などの幅広い人材が参加し、委員会に別れて組織された。野呂栄太郎ら日本資本主義論争の講座派論客も輩出する。このプロレタリア科学研究所設立にあたっては三木清が主要な論客として加わった。ただし三木は三〇年には政治運動化が強まるなかで批判を受け脱退する。柚谷氏の報告との関連で言えば、横光「人間学的文芸論」（『改造』三〇・六）は、プロレタリア科学時代の三木の論考「新興美学に対する懐疑」（『文芸春秋』三〇・四）と、三木の人間学的唯物論をマルクス主義の唯物論に照らして批判した土田杏村「人間学的唯物論と其批判」（『理想』三〇・五）に言及した文学論だった。この時期までの横光は「プロレタリア」文学派を「マルキシズム」「コミニズム」と呼ぶことが多く、理論的な関心から批判的に言及し論争した。唯物論としてのマルキシズムにはむしろ親近しながら、政治運動へコミットすることはなかった。小説の題材としてみれば初期短編から「機械」「上海」などまで、

めぐるプロレタリア文学派と横光との差異が興味深いと思つた。というのも、青野季吉「自然生長と目的意識」（『文芸戦線』二六・九）が明確に述べたように、マルクス主義的な資本主義の世界像（史的唯物論）、コミニズムへ向けての運動方針を「目的」として「意識」するところにプロレタリア文学派の「現実」認識の基底があつた。内容（現実）が形式（言語表現）を決定するとは、目的意識化された「現実」認識を言語で表現することだった。それに対して横光は、「現実」そのものの不透明な性質を、「現実とは騒音そのものに他ならない」（『文学的実体について』『読売新聞』二九・九・二七）ととらえた。それゆえ、形式（言語表現）を通じて内容（現実）が現れるという形式主義に立つ。その際「現実」は「意識」を介して現れることから、横光においては自意識の表現が「現実」の表象と本質的に関わる。横光における時代Ⅱ現実の認識は自意識の介在と不可分にあり、それによって「放蕩」する「現実」を表象することこそが課題だった。それは「純粹小説論」（『改造』三五・四）にまで一貫する。犯罪の認定をめぐって「マルクスの理論」が判事の心理にもたらす先入観が問題とされる「マルクスの審判」（『新潮』二四・五）、「流行」に突き動かされてしまふ「花婿の感想」の夫も、意識に介在する先入観と近代都市システムの媒介を経ながら、再帰的な自意識を介し、「騒音」のように、あるいは複眼的に、

不透明な「現実」として認識されることを書き込んでいる。それを極限的に示したのが「機械」(『改造』三〇・九)ではなかったか。さらにはもう一つの自意識としての読者との共同制作という純粹小説群にいたるまで、一貫した「現実」表象の原理だったように見える。プロレタリア文学派で自意識が問題とされたのは、三〇年代における亀井勝一郎や島木健作のように、マルクス主義の社会理論にもとづく党派的「政治」目的と「文学」者の主体的意識とのズレが問題となった転向問題だった。三〇年代前半に三木清も論じた不安の哲学¹⁾文学が問題とされた時期にあたる。

第一部の基調報告は、三四年以後を対象に、和田崇氏はプロレタリア文学の党派としての実質的な解体期に提起されていた大衆文学論を、中川成美氏は横光の欧州体験と『旅愁』第二篇の関連をそれぞれ報告された。

和田氏は、「純粹小説論」の裏側で、文学と大衆との関係という問題意識を共有して交わされた貫山治・徳永直の実録文学論争を取り上げた。貫山は「実録文学の提唱」(『読売新聞』三四・一一・九〜一一、一三)で、おもに歴史小説を念頭に史実や資料にもとづいて純文学に近づく小説を提唱。徳永直が念頭においたのは特殊階級(ブルジョア)むけの小説ではなく「錯綜した世相の底にトンボがへりうちつ、ある大衆の生活」(小説勉強(二))『文学評論』三五・五)を描

通選挙)の一方で、国際協調路線からの日本の離脱、三七年から本格化する日中戦争の進行と、東亜新秩序の理念的模索、総動員体制化へという、三〇年代の動向のなかで起こっていた。こうした危機の進むなかで三六年に渡欧した横光が遭遇したのがフランス人民戦線内閣、レオン・ブルム政権の誕生だった。中川氏は、政治運動としてのプロレタリア文学運動に対して距離をもちコミットしてこなかった横光がはじめた政治運動のリアリティに遭遇した体験だったのではなかったかという観点から、『旅愁』第二篇をとりあげた。そこに単なる国粹主義に傾倒したのではないバリ体験の意味を読み取った。新感覚派時代から言語と民族の関係に言及していた横光が、実体として民族を措定していくのと並行しつつ、そうした傾向に一元化しえないもう一つの揺らぎの軸を書き込んでいるとした。

中川氏の報告は横光におけるグローバル化する時代の「現実」表象として、和田氏の報告は大衆社会化と文学の問題として提起されていた、と私には見えた。

以上、拙速ながら議論に参加して私にみえた脈絡の一端である。とはいえ、なお視角が悪く、飛行機の小窓から地上を眺めたように死角が大きい。遮られ見逃し曇った光景が残る。可能性の領野がモヤモヤと。

いた小説だったという。三〇年代には島崎藤村が『夜明け前』(二九〜三五)で幕末から明治の歴史を題材に小説を書いていた。これに触発されたところも大きく、林房雄『青年』(三二〜三四)をはじめ、プロレタリア文学退潮期の『文芸復興』以後は、歴史小説隆盛期だった。「文芸復興座談会」(『文芸春秋』三三・一一)で佐藤春夫も「これからどういふものをお書きになりますか」との質問に対して「僕は歴史小説を書きたい」と発言した。小林秀雄が「一流作家に現代小説を書いてももらいたい」「歴史小説なんていふものは書いて貰ひたくないな」と言うと、佐藤は「現代の文芸批評、社会批評といふものは不慮慮にすることは到底不可能」で「五・一五事件を書くことは許されぬでせう」と題材の規制に触れ、「現代小説を封ぜられて居るから、止むを得ず歴史小説でも書くより外無いと思ふんですね」と言う。貫山治の主張はそうした三〇年代前半の動向とも関連するだろう。²⁾『文芸復興』プロレタリア文学運動に対する弾圧は、二八年二月に実施された普通選挙直後の三・一五事件をはじめ、二九年の世界恐慌、三二年の満洲事変と三三年の国際連盟離脱という経済・政治状況を迎えるなかで繰り返される。世界的な経済・政治の動乱に応じて、グローバルな国際協調から、ヨーロッパ、アメリカに対するアジアの地域主義へシフトしていく。プロレタリア文学運動に対する弾圧と解体は、大衆の市民化(普

① この観点については拙稿「グローバル化と大衆化の一九二〇年代―錯綜としての中間という問題圏―」(『文芸研究』一八三集、二〇一七・三)で論じた。

② 梅田俊英『社会運動と出版文化』(御茶の水書房、一九九八・一一)第三部を参照。